

紀 要

第 19 号

2006. 3

財団法人 滋賀県文化財保護協会

甲賀の城のネットワーク

木戸雅寿

1. はじめに

甲賀忍者と伊賀忍者。隣国同士の最も有名な忍者の対決は、子ども心にわくわくしたことを記憶する人々も多いことであろう。しかし、これらの忍者は歴史的に見れば、その存在と名称は否定されなければならないものである。おおよそ中世から戦国期にあっては、文献では忍者の存在はなく、彼らは「甲賀者」、「甲賀衆」というような言葉で登場することが多い。地域の集団として呼称される背景には、彼らが団結の高い地域集団であり、その中からは数多くの勇猛な武将を排出していることや、諜報活動といった卓越した分野に活躍していることがその特徴としてあげられるであろう。これら武士団が築いた城とされるのが、甲賀郡を中心とする地域に存在する甲賀の城郭群である。その数は有に230城を超える、この数は日本一多いと云われる滋賀の城郭数約1300城の実に18%にもあたっている。反面、甲賀の城には謎も多い。集落の中や裏庭に数多く現存する形で残されていながらも、絵図や文献資料が少なく、伝承も少ない。また、立地や形態において特徴があり、また、非常に狭い地域に密集していることも特徴的である。これらの様子は、武士団の形成や地域支配と密接に関わっている。数少ない文献による文献調査では、地域の支配形態に対するアプローチが進められている。しかし、城郭研究や考古学的研究という側面からは、まだまだ城からの明確な論拠には未だ至っていないのが現状である。研究が遅々として進まない大きな要因としては、信頼に足る縄張り調査や悉皆調査がしっかりと行われていないこと、大規模な目的を持った発掘調査がなされていないことがあげられるであろう。

これらのことを踏まえて、ここでは、甲賀の城郭群を考えていく上で、その枠組みとなるネットワークを中心に検討し、甲賀の城の持つ意味とその特質を考えてみたい。

2. 世に言う「甲賀郡中惣」とは

(1) 甲賀二十一家と五十三家

甲賀郡の城郭を考えるにおいては、城主である氏族間による地域支配の構造が問われることがある。世に言う「甲賀郡中惣」である。武士団による地域の支配体系が、城の構造や位置、位置づけに反映されているのではないかとする考え方によれば、これは重要な問題である。支配する者があり、支配する地域と守る物がある場合、外的からそれらを守るために城を築いたと考えられ、これら地域支配体系に基づいた築城政策があるのではないかという前提で論議できるからである。それでは、ここで世に言う「甲賀郡中惣」とはどのようなものを指すかということを見たい。これまでの文献資料¹⁾による研究では、郡中惣の成立は、天文21年(1552)～永禄11年(1568)で、終焉は慶長期に入ってからとする考え方が一般的とされている。契機は伊賀の国一揆や、織田信長が近江に侵攻し甲賀地域に進出する状況に対抗するためのものと考えられている。終焉は豊臣政権による検地による自治組織の解体である。これら惣中化は、近江では珍しくなく甲賀郡以外の草津・守山などの地域においても、侵攻してくる信長に対抗するために寺内町等、集落の自治組織としての惣が認められることができる。そもそも、甲賀郡中惣とは、甲賀側が自身の先祖伝来として、その謂われを書き記したものに認められるものである。それによると、長享元年(1487)九月に將軍足利利義尚が六角高頼を征伐に来たおり陣を敷いた鈎安養寺(現在の栗東市鈎)を六角氏が攻めた折りに六角氏が甲賀地侍の援助を請い、それに呼応する形で参陣した者達を指す。後にその功を認め六角氏から感状を与えられた家柄として記録されているものである。したがって、彼らは六角氏の直接的な被官人ではない。ここに、あげられている氏族名は、諸本によって若干の相違があるが、おおむね以下のとおりである。甲賀二十一家とし

て、山中氏・伴氏・美濃部氏（柏木三家）、鶴飼氏・服部氏・内貴氏（荘内三家）、和田氏・上野氏・高嶺氏・多喜氏・池田氏（南山六家）、黒川氏・頓宮氏・大野氏・大河原氏・岩室氏・佐治氏・神保氏・隠岐氏・芥川氏（北山九家）。ただし、荘内三家に望月氏と芥川氏を入れて柚五家、南山六家に隠岐氏を加え南山七家、大野氏・隠岐氏・芥川氏をのぞいて北山六家とし都合二十一家とする場合もある。五十三家はこれに儀峨氏・高山氏・山上氏・新庄氏・葛城氏・杉谷氏・望月氏・巽庭氏・高野氏・青木氏・鳥居氏・平子氏・土山氏・小川氏・多羅尾氏・牧村氏・長野氏・宇田氏・針氏・八田氏・夏見氏・三雲氏・岩根氏・宮島氏・倉治氏・小泉氏・杉山氏・上山氏・上田氏・野田氏・大久保氏の三十二家が足されたものである。

（２）同名中と地域惣中の問題

これらが現在知られている甲賀郡内の惣中である。惣は、地域独自の連合体による合議制によって地域支配を行うもので、惣中は基本的にピラミッド型を形成している。本来的には、底辺部に位置する同名氏族の同名中惣の代表が地域間で連携した形が、柏木三家、荘内三家、南山六家や北山九家といった地域惣中を形成している。したがって、郡惣中として連合体が形成される以前からも、同名惣中や地域惣中の存在が前提として考えられ、時代的には歴史的要求の結果としてより上位の惣中としての郡惣中が完成したと想定できる。ただし、記録に残るこれらの氏族は単に鉤の陣に参陣した者達として、『佐々木南北諸氏帳』（以下『諸氏帳』）にあげられ、お互いが認識しあったものたちであるという前提であり、六角側が随兵として認識した氏族として把握したということも考えておかなければならない。もちろん、惣中構成員としては、これら以外の氏族の存在も考えられること、姓名が違っていても同名中であることも既に指摘されている。また、同名中は、大字ごとの在地領主であり、その経営体の在り方には論議があるところであるが、地域内の支配と守護との関わり等によって、横との連合、縦の関係の在り方は異なっており、その位置づけが城館や山城、集落形成の在り方に多大な反映を及ぼしていると考えられるところである。

これらのことを検証していくためにも、まずは記

録に残された同名中と地域惣中の状況と残された城の位置関係とを見ながら、これら城のネットワークの在り方を検討していきたい。表1は、現在知られている周知・未周知の遺跡としての城郭と『諸氏帳』と『芥川氏正徳二年自記 甲賀古上之事』（以下『正徳二年自記』）に認められる城主と城名を対比させたものである。遺跡番号のないものは、『滋賀県中世城館調査報告2³⁴』で報告されているものである。

3. 同名中と地域惣中のネットワーク

（１）柏木三家と柏木惣中（図1）

柏木三家とは、山中氏・伴氏・美濃部氏を指す。三家による、おおよその支配地域は、東は湖南市水口町、西は横田の渡し、南は宇川（氏河原）、北は湖南市八田である。山中氏の領地・職分である柏木神社を会所と中心とする一円が関与域である。

①山中氏

山中氏については、唯一と言っていいほど数が残っている文書を用いて、これまで文献史学の見知から繰り返し研究が進められてきているところである。論じられている主な内容³⁵は、地域支配の様相と郡中惣の成立過程である。山中氏の全容については、すでに竹山靖玄³⁶氏が述べられているので、それに沿って整理すると以下ようになる。山中氏は、元来は伊勢国との国境鈴鹿近辺に土着していた武士であり、その惣領家は山中村地頭職・鈴鹿山地頭職＝鈴鹿関警固役を先祖伝来相伝の所職としていた鎌倉御家人であり、後に奉公衆であった地頭職である。『橘系図』によると、山中氏は橘左大臣諸兄の子孫と称しており、修理亮義清の頃には甲賀郡山中村（土山町山中）に居住していたことから山中氏を称していたことが分かる。建武2年（1335）の「柏木御厨惣庄検断職安堵状」によると、その後、鈴鹿山守護の恩賞として、柏木御厨庄検断職と伊勢神宮政所を与えられ、それ以前から柏木御厨祭主保保司職にもなっていた関係で、このころから御厨内の土地所有を進んで行い柏木郷に進出してきたと考えられている。柏木御厨の実態については、詳しいことはよく分らないが、現在の柏木神社（3）を中心とする地域にひろがっていたと考えられて

いる。本来の拠点は、甲賀市土山町山中であるが、山中氏の財産分与に当たり、山中の所領を子に分配するなかで、新たな拠点作りとして14世紀前半から、拠点を山中から甲賀市宇田に移し、山中一族の宇田館（1）を構えていたものと推察できる。惣の中心は植（上）城（2）⁶¹と宇田である。城は館と集落という典型的な様相を示している。ここに宇田山中氏を惣領とする山中氏が成立する。歴代の譲り状には、地頭職、惣庄検断職、御厨祭祀権、名支配の権利や知行権利が明記されており、在地領主としての惣自治権力の姿が垣間見られる。この支配状況は、信長が甲賀郡に進行してくる頃に最盛期を迎え、惣中はさらに協調関係を重視した郡惣中へと進展していった。しかし、豊臣秀吉による支配が開始された。天正13年（1585）の雑賀攻めに際して甲賀衆が背いたことを理由に、惣中が改易され知行地を召し上げられている。後に、山中氏はその責めを許され、慶長5年（1600）年に郷里にもどされるが、邸地を一町四方として限られており、おそらく、領主としての権限はなく、邸地のみを与えられたものと考えられる。さらに弘化年中（1844～1848）に居を水口に移されている。このように、山中氏は、柏木御厨の神官という立場を利用し、柏木郷にある植（上）や宇田に進出していることは間違いない。支配小域は、東は柏木神社、西は横田川の渡し、南は宇川（氏河原）、北は北脇であると推測される。

②伴氏

伴氏は、大伴氏の末裔と云われており、本拠地は湖南市伴中山の伴中山城（19）である。鎌倉御家人の家柄で、分家筋として後に大原氏・上野氏・喜多氏を生じ伴四家といわれている。『諸氏帳』には、伴播磨守としてその名がみえ伴村住となっている。信長侵攻以後は信長の家臣となっている。伴氏に関わると考えられている城郭群に、思川沿いの堂垣内城（20）・西出城（21）・坊村城（22）や対岸の泉丘陵上の下山城（5）をはじめとする城郭群（6～11）がある。支配領域は、東は甲賀市水口町山、西の朝国南・北脇、北の八田と山中氏との領堺と考えられるが不明な部分も多い。

③美濃部氏

美濃部氏は、菅原氏の末裔と云われており、本拠

地は、甲賀市水口町水口（元美濃部村）。現在の近江鉄道水口石橋駅を中心とする地域に美濃部屋敷城（23）があったと推定されている。かつては四方を囲む土塁が存在していたようであるが、現在は市街化が進み、遺跡地図からも欠落している。『諸氏帳』では、美濃部源吾の名が見え、美濃部住となっている。同族に富川・神松・武島・大谷・米田の名が上がっている。

④その他の柏木郷内の氏族

ア、八田氏

その他の柏木郷内で確認できる氏族としては、まず八田氏があげられる。八田氏は五十三家に数えられる氏族で、本拠地は湖南市八田である。『正徳二年自記』には八田勘助の名が認められるが、『諸氏帳』には名も城の記載もない。城跡は未発見である。

イ、上山氏

上山氏も五十三家に数えられる氏族で、本拠地は甲賀市水口町山（上村）で、中世にあっては柏木御厨上山村郷に属していた。近隣では山村城（14）・山村引田城（15）が確認されている。『諸氏帳』には上山新八、『正徳二年自記』には上山新八郎の名が見えるが、氏に関する記録は少ない。

ウ、中山氏

中山氏である。中山氏は、五十一家に属すが『諸氏帳』にはその名が見えず、『正徳二年自記』に中山民部丞として見える。本拠地は、甲賀市水口町畑（畑村）の伴城（未周知）である。遺跡地図からは欠落している。その伝承名からも、伴氏との関わりが想定できる。

（2）荘内三家と荘内惣中（図2）

荘内三家とは、鵜飼氏・服部氏・内貴氏を指す。三家による、おおよその支配地域は、東は甲賀市甲南町と甲賀町境、西は飯道山、南は伊賀との国境、北は野洲川である。会所には、森尻の矢川神社や三大寺の日吉神社、内貴の川田神社が使用されたと考えられる。

①鵜飼氏

鵜飼氏は、甲斐を出自、橘をその祖と称していた奉公衆であるとされている。『諸氏帳』には、鵜飼現八（『正徳二年自記』には鵜飼現八郎）の名が見え、山中城が居城とあるが、現在は、甲賀市甲南町深川



図1 柏木・荘内地域

字片岡にある(深川)城山(25)が居城として比定されている。また、別に信楽町宮町が本拠地との説もあること以外、詳しいことは分っていない。

②服部氏

近江の服部氏は、服部半蔵でも有名な、本能寺の変で徳川家康が堺から落ち延びたときの伊賀越えの道案内をし、後に徳川十六将のひとりとして教えられた服部石見守正成の同族である。もとは鎌倉御家人で『諸氏帳』や『正徳二年自記』には服部藤大夫の名が見え、杉谷住とある。城は甲南町新治の服部城(35)が比定されている。服部城は新宮神社脇の舌状丘陵上に位置し、一辺200m四方を土塁で囲まれた方形城郭である。その背後の丘陵にはさらに大きな土塁囲いの方形城郭である新宮城(36)と新宮支城(37)がある。さらに、大谷池を挟んだ対岸にはより規模の大きく構造の違う持前城(38)と村雨城(39)がある。これらは、佐治を中心とした縁辺部に築かれていることから、服部氏が地域を防御するための一体の城と考えられる。

③内貴氏

内貴氏は、水口町東内貴を本拠地とする。『諸氏帳』には内貴三郎左衛門・伊賀守、『正徳二年自記』には伊賀守の名が見える。城は川田神社に土塁囲いの方形居館として内貴伊賀守孝則居城内貴城(72)、隣接して北内貴城(73)が知られている。

④その他の荘内の五十三家

イ. 倉治氏

倉治氏は、『諸氏帳』に倉治右近、『正徳二年自記』に倉治右近介の名があり、杉谷住とある以外は詳しいことが分かっていない。居城は倉治城(40)で、川縁の段丘上に土塁囲いの方形居館として認められる。また、近接した領内には同じく段丘上に新治城(41)や300m北西には半町四方の土塁囲いの方形居館として竹中城(42)が確認されている。その形状から、これらは同族別人の屋敷跡の可能性はある。

ロ. 望月氏

望月氏は、飯道山を中心とした修験者を統括する神人とも云われており、甲南町柑子を本拠地とする奉公衆である。『諸氏帳』には望月刑部左衛門・出雲守、『正徳二年自記』には出雲守を城主とすると

ある。中世にあっては六角氏寄りであったが、天正11年以降は秀吉の家臣となり、江戸時代を生き抜いた。ちなみに、甲南町竜法師にある「甲賀流忍術屋敷」が、出雲守の屋敷とされている。城は柑子の浅野川兩岸の段丘上に伝望月為三郎重武の屋敷中屋敷とその居城青木城(48)、伝望月村島重元居城村島城(46)、村島支城(47)として知られている。また、離れた字杉谷にも望月氏の居城として、丘陵の尾根の先端に土塁囲いの方形居城として築かれている望月城(43)、望月支城(44)、杉谷砦(45)があげられている。また、磯尾にある磯尾城(28)、上磯尾城(29)からも地域の背後からの監視としての色彩の強い城がある。これらのことから、かなり広範囲な地域的支配があったものと考えられる。

八. 杉谷氏

杉谷氏は『諸氏帳』、『正徳二年自記』には、杉谷與藤郎の名と杉谷住が見える。知られている杉谷城(49)は、丘陵の尾根先端に築かれているが、形状は居城タイプではない。

二. 野田氏

野田氏は、『諸氏帳』、『正徳二年自記』に野田次郎の名と杉谷住と見える。永正17年(1520)の九里の乱で滅亡したとの伝承がある。城としては、周知の遺跡としては欠落しているが、『中世城郭分布調査2』(以下、『中城報2』)には甲南町野田に野田城(68)が知られている。詳細は不明である。

ホ. 饗庭氏

饗庭氏は、高島郡饗庭の出身で『諸氏帳』、『正徳二年自記』には饗庭河内守の名と杉谷住が見える。城は、甲南町竜法師に饗庭城(69)として知られているが、距離的には野田に近い。本来的には竜法師一帯は望月氏の所領といわれていたことを考えると、間違った比定をされているか、饗庭氏自身が望月氏の傘下のどちらかであると考えられる。また、平成16年度に第2名神関連⁶⁾で発見され発掘調査された竜法師城(70)も位置的には字竜法師に当たる。饗庭城からは距離があるが、城の形態⁷⁾が見張り台的要素が高いことを考えると、いずれかの城もしくは地域の「手端の城」にあたるものと考えられる。

ヘ. 葛木氏



図2 荘内・南山地域

葛木氏は、『諸氏帳』、『正徳二年自記』には饗庭丹後守の名と杉谷住と見える。城は、甲南町葛木に葛木城(71)が知られているが、詳細は不明である。

ト. 山上氏

山上氏は、『諸氏帳』に山上藤七、『正徳二年自記』山上藤七郎の名と杉谷住と見える。城は、水口町山上の丘陵上にある山上城Ⅰ(81)、山上城Ⅱ(82)と消滅されたとする山上館(83)が知られている。背後には、信楽道の要に位置する庚申山があり、山頂にある広徳寺城(84)が山城であるならば、詰城の可能性がある。

チ. 高山氏

高山氏は、『諸氏帳』、『正徳二年自記』に高山源太左衛門の名と杉谷住と見える以外は詳しいことは分らない。城は柚川を見下ろす高台の水口町高山に高山氏城(86)、高山屋敷城(88)、御姫屋敷城(89)が知られている。子孫には、高山右近に代表される摂津高山氏や飛騨の領主となり慶長10年(1605)に高山城を築く高山氏がある。また、これらに加えて、飯堂山の山麓の岩阪も領していたという記録があり、「(衛藤)えんどう屋敷」の伝承を持つ平子城(90)や篠原源太の屋敷と伝えられている源太郎屋敷(89)も高山氏一族の城と考えられている。

⑤その他の荘内の氏と字の城

イ. 寺庄氏

寺庄氏は、五十三家には名を記していない。一色の子孫と云われており、明応年間に一色輝兼の領地を、その子権八郎兼秀が寺庄を名乗り受け継いだと云われている。城は、柚街道沿い甲南町寺庄にある方形居館寺庄城(26)であったが、明治22年の関西線施設に伴って破壊され現存していない。

ロ. 福島氏

福島氏、五十三家には名を記していない。望月氏の一党と考えられている以外、詳しいことは不明である。居城は塩野にある塩野城(50)である。

ハ. 虫生野

虫生野には、虫生野堂の前城(74)と北虫生野城(75)が知られている。ともに、柚川沿いの丘陵の上にある。虫生野は元は深川村に属していたので、それでいくと猪飼氏の領地に属するが、城の位置的には内貴氏の領域に近い。どちらに属するの

か、在地領主が存在するのかは今後の課題である。

ニ. 森尻

森尻は、柚川沿い矢川神社の森尻にあることからその名がある。もとは京都広隆寺領の荘園で深川に属していたことを考えると、知られている森尻屋敷城(27)は猪飼氏関係のものと考えられる。

ホ. 野尻

野尻は柚川を挟んだ寺庄の向かい左岸側に位置する。城は野尻城(33)と野尻支城(34)が知られている。いずれも半町四方の土塁囲いの方形居館であり、本城・支城と云うよりも、居館が二つと考えた方がよいであろう。

ヘ. 市原

市原には、延文五年(1360)に六角高秀が在城したという市原城(30)、市原監城(31)、古屋敷城(32)が知られているが、詳しいことは分っていない。位置的には、望月氏や倉治氏や山上氏の間当たる。いずれかに属するか、家臣となる知られていない在地領主がいたかのいずれかであろうと考えられる。

ト. 柚中

柚中は甲賀大工の中心地で、古くは柚池田庄として京・奈良の柚として活躍した地である。城としては柚中城(80)があるが詳しいことは不明である。

チ. 牛飼

牛飼は、信楽谷に入る信楽道の入口に当たる集落で、城としては牛飼城(79)が知られているが、城としての形態には乏しい。

リ. 三大寺

三大寺は、飯堂寺・薬王寺・道德寺にちなむ名で、城としては竹中城(85)が知られているだけである。

⑥六角氏との被官要素の強い氏

イ. 儀峨氏

儀峨氏は蒲生権賢の五男俊光を祖とする。儀峨の地はもともと勸学院領儀峨庄で、建武年間から儀峨氏を名乗り代々の下司職をつとめていた。天正年間に蒲生に復姓し。蒲生一族ということもあり、荘内や南山領域の狭間にありながら、六角色が強く、地頭職に補され六角重臣として扱われている。後、蒲生氏の元で信長・秀吉に仕える。城は、水口町儀峨元屋敷に方形居館である儀峨城(76)、儀峨西城

(77) があり、遺跡地図からは欠落しているが、背後の備後山に備後城(78)が築かれていた。廃城後は、堀田外記の陣屋として利用されている。

ロ. 新庄氏

新庄氏は、『諸氏帳』、『正徳二年自記』に新庄越後守の名と杉谷住と見える。佐々木氏の家臣で正応3年(1290)頃は、伊勢守宗重として新城城を領地としていたが、姓を新庄と改めた。多賀神社の神官となり、姓を車戸と改めたが後に復姓。一族は後に坂田郡に転出し戦国時代の新庄氏として活躍する。城は周知の遺跡からは欠落しているが、新城氏城(91)として知られている。

ハ. 三木氏

三木氏は、五十三家には名を記していないが、嘉吉(1441)ころに新城の領主として三木又右衛門の名が確認できるので、居城である三ツ木城(92)は新庄氏が転出した後に築かれたかもしれない。儀峨氏の家臣と考えられ、天正15年(1587)に三木肥後守が蒲生氏の家臣として伊勢に居を移している。

(3) 南山五家と南山惣中(図3)

南山五家とは、大原氏・和田氏・高嶺氏・多喜史・池田氏を指す。五家による、おおよその支配地域は、東は甲賀市神、西は浅野川、南は油日、北は甲賀市大原である。

①南山五家

イ. 大原氏

大原氏は、伴善男の末裔であることを称しており、同じように末裔であることを称している柏木三家の伴氏、南山六家の上野氏、多喜氏とともに同族関係にある。古くは、『吾妻鏡』に見られる伴四郎資兼が先祖で三河国設楽郡が出自である。法勝寺領大原庄に領地を得てから大原氏を名乗っている。『諸氏帳』には名がないが、『正徳二年自記』には、大原源三郎・源太の名が見える。後に、大原源三為家の子家親が加津井五郎を名乗り、その子景が勝井と改め、大久保・上田を支配していた。この『大原勝井家文書』に伝わる「大原同名中惣の掟書」に有名な

「同名中惣劇ニ付而、他所与弓矢出来之時者、手はしの城江番等入事在之者

各致談合、人数をさし入可候、其時相互二如在申間敷候事」

項目がある。これにより同名中は、臨戦態勢に於いて協力関係が義務付けられ、城の中に、中心となる城と在番を入れることを位置づけておくような城をわけて考えていたことが分る。さて、その城であるが、甲賀町田堵野に土墨囲いの方形居館として大原氏城(93)が知られている。これ以外にも近隣の大原市場には、補陀楽寺城(107)、陣山城(108)、別府城(109)が知られている。大原城は居館であるので、これらが「手はしの城」になるのか、または、領域の周囲に点在する同名惣中の他氏や家臣の城をさすのかは、今後の課題である。

ロ. 和田氏

和田氏は、もとは源氏姓を名乗る氏族で、広隆寺和太庄の荘官であったと考えられる。足利義満の家臣伊賀守兵庫頭が知られている。『諸氏帳』には和田次郎秀正・和泉守貞国、『正徳二年自記』には和田伊賀守の名が見え、和田城の名がある。織田信長は、奉公衆であった和田惟政を頼り大和から足利義昭を連れ出して守山市の小島御所に囲い上洛している。惟政は、のち芥川城主となったが、永禄年間に戦死している。居城は和田城(116)と云われているが、柚川の支流和田川両岸の舌状丘陵の先端に残一群をなすように、地域の城として和田支城A(121)、和田支城B(122)、和田支城C(123)、棚田城(118)、義昭が滞在していたと云われている公方屋敷(117)、公方屋敷支城(120)、殿山城(119)が知られている。

ハ. 上野氏

上野氏は、伴家を祖に持つ氏で伴氏や大原氏、多喜氏とは同族である。足利直義の家臣で奉公衆と考えられる。『諸氏帳』、『正徳二年自記』には、上野主膳の名と上野城が見える。城は、土墨囲いの方形居館である北上野城A(124)と北上野城B(125)や観音堂城(126)、富田城(127)の一群と木内城(128)、竜泉寺城(129)が知られている。また、領地内である油日一帯にも、前山城(172)、中山城(173)、富田城(174)の一群、油日城(175)、油日館城(178)、油日城2(179)の一群、上野城(176)、龍山寺城(180)等の数多くの城が知られ

ている。

二. 高嶺氏

高嶺氏は、『諸氏帳』、『正徳二年自記』に高嶺蔵人の名と高嶺城の名が見える。天正年間に滅亡しと云われている。高嶺は甲賀と伊賀の境目に近く、城は、本城である高嶺城（130）を中心に、ひとつは国境を監視する高嶺山城（134）を要に麓に高嶺南城（135）と伊賀見（133）を配置するグループと、高嶺東谷城（136）、高嶺中城（132）、高嶺北（131）を見る山頂や尾根上に山城として築かれているグループとがある。また、位置的に見て上馬杉の栢の木城（67）もこれらの一群に含まれているものと考えられる。

ホ. 多喜氏

多喜氏は、『諸氏帳』に多喜勘介、『正徳二年自記』に多喜勘八郎の名が見え、多喜住とある。祖先は大伴家を名乗り、奉公衆であった。子孫には中村一氏がいる。城は、多喜城（137）を中心に東に多喜南城（139）、西に多喜北城（138）、南に梅垣城（140）が三方を監視するような地域の城が築かれている。

ヘ. 池田氏

池田氏は、藤原を祖とする氏族である。『諸氏帳』には池田太郎定信・庄三郎信輝、『正徳二年自記』には池田庄右衛門の名と池田城の名が見える。領地は馬杉庄池田保であり、奉公衆とも考えられている。城は、池田東城（142）と池田西城（143）が知られている。領内には中野城（144）他、5城の名があがっているが、いずれも詳細は不明である。

②南山五家以外の五十三家

イ. 鳥居氏

鳥居氏は、『諸氏帳』、『正徳二年自記』に鳥居野兵内と鳥居野城の名が見える。子孫には鳥井元忠がおり、江戸時代には水口城主もつとめたことがある。城は、土塁囲いの方形居館である鳥居野城（113）である。また、近隣には土塁囲い方形居館を連結したような大鳥神社城（114）も知られている。

ロ. 青木氏

青木氏は、美濃青木氏の次郎頼忠が、建久年間にこの地に移住したに始まるとされている。最終的にはこの地を離れている。一族の中には、姉川の合戦で真柄十郎左衛門を討ち取り、後に秀吉に仕え摂津

麻田一万石の大名になった青木民部小輔一重や夏見青木氏がいる。『諸氏帳』、『正徳二年自記』には、青木筑後守の名と池田住と見える。城は、甲賀町滝字青木の青木城（141）が知られている。

ハ. 大久保氏

大久保氏は大窪とも書く。『諸氏帳』、『正徳二年自記』には、大久保源内の名があるが、三雲住となっており、比定に問題も残されている。城は櫛野川沿いに大窪城（149）が築かれていたようである。他にも南城（150）が知られているが、いずれも詳細は不明である。

ニ. 上田氏

上田氏は、『諸氏帳』、『正徳二年自記』には、上田三河守の名と杉谷住みと見える。城は、甲賀町大原上田の上田城（151）が知られている。

ホ. 高野氏

高野氏は、『正徳二年自記』高野備後守の名が見えるが、ほとんど記録が残っていない。天正年間に滅亡したと云われており、福生寺に遺品が残されていると聞く。また、墓地に近代になって立てられた墓石がある。高野集落には、かつて館だったと考えられる方形の高台が2カ所ほど残っており、その背後の山が高野城（152）と認識されている。平成16年度から第2名神工事により発掘調査が続けられており、尾根部を中心に平坦な削平地や堀状の遺構が多数検出しているが、明確に城の時期を示す土器等は発見されていない。

③その他の南山の氏と字の城

イ. 滝川氏

滝川氏は、詳細が不明であるが、戦国期に滝川一益を輩出した氏族である。櫛野は中世は天台宗櫛野寺領であった。城は櫛野川両岸に築かれている滝川城（93）、滝川西城（94）、滝川支城（95）、櫛野大原城（97）が知られている。

ロ. 奥氏

奥氏は、応永11年（1040）「鈴鹿山賊名中」（『山中氏文書』）に「大原奥被官人七郎同子」と名を残すように、大原氏の被官人であった。城は甲賀町神にある土塁囲いの方形居館である奥殿城（98）がある。神には、西ノ口城（99）、唐戸屋敷城（100）、忠道屋敷城（101）、神館城（102）も知られており、

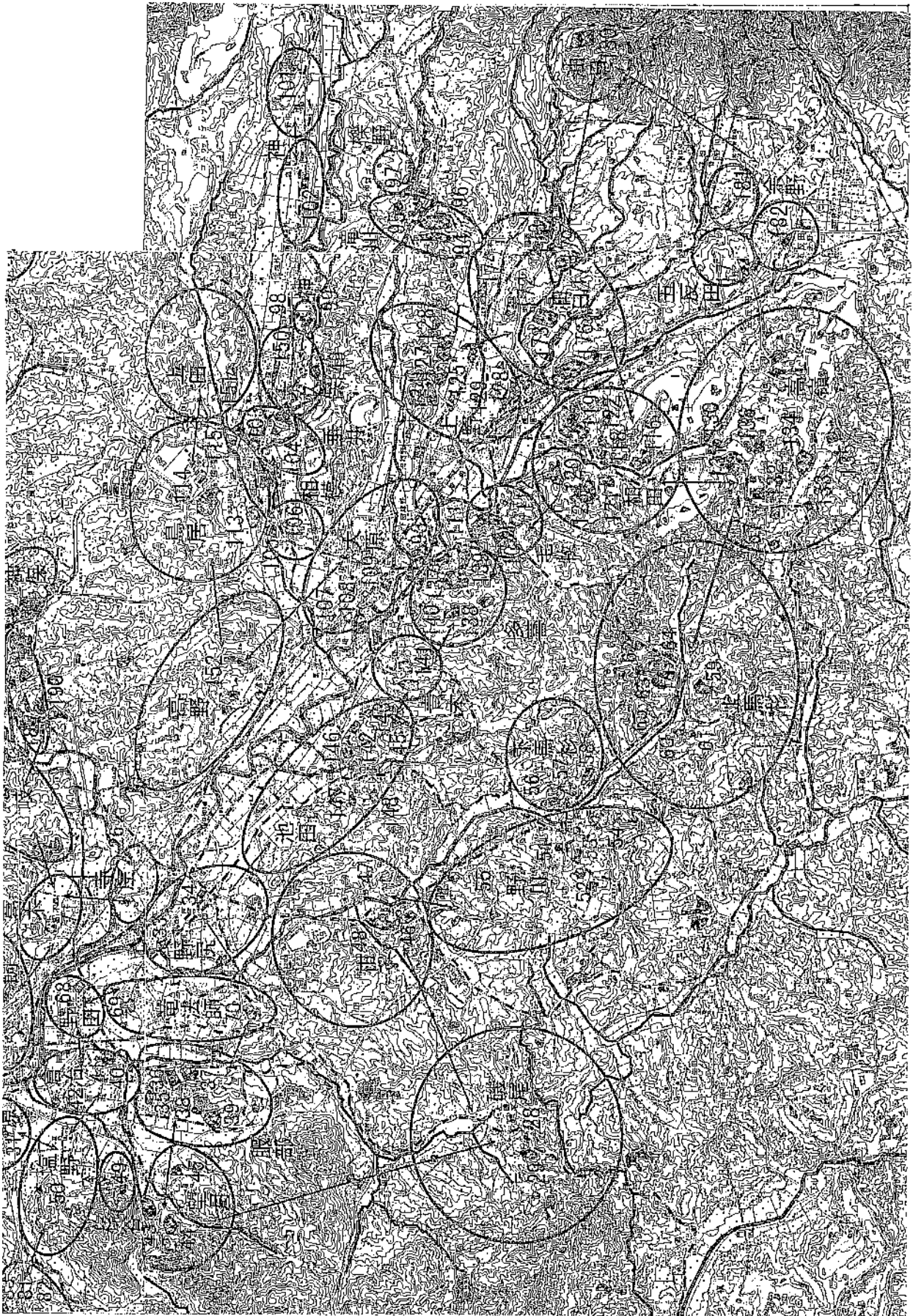


図3 南山地域

これらの城も奥氏と同じような大原氏の被官の城かもしれない。

ハ. 垂井氏

垂井氏は、元は美濃垂井の出身で応永年間にこの地で領主となった垂井甲斐守に始まる。城は、土塁囲いの方形居館である垂井城（甲斐屋敷）（103）と大原中城（104）が知られている。

二. 竹林氏

城は大原川に接するように築かれた土塁囲いの方形居館である竹林城（105）とその背後の山に相模篠山城（106）が知られている。

ホ. 山岡氏

山岡氏は、後に瀬田城主となった山岡隆景等一族である。城は中央を毛牧川が流れる毛牧集落の兩岸の丘陵沿いに、山岡城（110）、毛牧北城（111）、獅子ヶ谷城（112）が地域の城として築かれている。

ヘ. 篠山氏

篠山氏は、大原氏の一族で篠山理兵衛景春を名乗る。後に、烏井元忠の家臣として伏見城に籠城し討ち死にしている。城は、土塁囲いの方形城館である篠山城（115）が知られている。

ト. 福井氏

野川集落には福井氏政が建立したと云われている福泉寺がある。城はその裏山にあり、上野川城山1～3号城（51～53）として知られている。また北に離れた場所に野川城（55）が知られている。

④六角氏との被官要素の強い氏

イ. 馬杉氏

馬杉氏は、五十三家には名を記していないが、延徳年間（1489～92）頃に方十五間からなる馬杉城本（59）に住み馬杉を領有していた。六角氏被官白旗隊の馬杉丹後守が知られている。また、信長による比叡山焼き討ちにも活躍し、高野山世衆来迎図の裏書きに名を残す表具師馬楯甚三郎秀昌も一族と考えられている。信長の元亀争乱で滅亡している。城は、伊勢に抜ける旧道沿いの南側の丘陵城に馬杉本城を中心とする一群となる馬杉城（60）や馬杉城と対をなす馬杉支城（61）や井口氏城（65）、道の北岸には馬杉北城（62）を中心にして一群となる柴田砦（64）、岡之下城（66）、馬杉中城（63）としてある。また、もとは同じ馬杉だったと考えられ

る下馬杉にも、同じように堂城（54）、西出城（56）、谷出城（57）、小池城（58）が知られている。井口氏城のように城名に名を残す者があるので、支城群は家臣が守城していた可能性もある。

（4）北山九家と北山惣中（図3・4）

北山九家とは、黒川氏、頓宮氏、大野氏、大河原氏、岩室氏、佐治氏、神保氏、隠岐氏、芥川氏を指す。九家による、おおよその支配地域は、東は伊勢との国境、西は隠岐、南は伊賀との国境、北は野洲川までの横に細長い範囲である。

①北山九家

イ. 黒川氏

黒川氏は、『諸氏帳』に黒川久内、『正徳二年自記』に黒川文内の名と黒川住と見える。藤原秀郷を祖と称している。応仁文明年間に黒川與四郎が蒲生郡馬淵下司職となる。その後、六角氏に与し黒川の地を与えられる。山女原、笹路、黒川、黒滝、鮎河とその領地は広い。城は、黒川に黒川砦（153）と大宮神社城（154）と、鮎河には永禄年間に黒川玄蕃佐が築城した黒川氏城（168）と元頓宮氏が築き黒川氏領となった鮎河城（165）や親王森城（166）が知られている。天正13年に秀吉により廃城させられる。黒川氏自身は、豊臣秀頼に与し滅亡する。甲賀には珍しい大規模な山城であり石垣がある。この事実より一時織豊政権下にあった可能性がある。

ロ. 頓宮氏

藤原を祖と称しており、建武年間に鮎河城を築城したが小佐治氏らに敗れる。『諸氏帳』、『正徳二年自記』には頓宮四方介の名と頓宮住と見える。城は、頓宮御所を中心に頓宮館（155）、頓宮山城（156）、頓宮池ノ谷城（157）、野上野城（158）が知られている。また、頓宮を廃せられた後は、青土や瀬の音でも城を築いている。

ハ. 大野氏

大野氏は、『諸氏帳』に大野宮内小輔義宗・勘十郎・佐馬亮・左近、『正徳二年自記』に大野宮内小輔と大野城の名が見える。後に信長により滅ぼされる。大野氏は街道の警護役を命じられていた。城は、大野大屋敷城（159）、大野山本城（160）、大野城（161）が知られている。

表2 南山・北山・三雲・信楽地域城郭一覧

Main data table with multiple columns: 城郭名 (Castle Name), 所在地 (Location), 形式 (Form), 築城時期 (Construction Period), 備考 (Remarks). The table lists numerous castles such as 南山, 北山九雲, 北山, etc., with their specific details.



圖4 北山地域

ニ. 大河原氏

大河原氏は、『諸氏帳』に大河原左馬之助・源太、『正徳二年自記』に大河原源内の名が見える。城は松尾川の西岩の丘の上に大河原氏城（164）が知られている。天正年間に廃城となっている。

ホ. 岩室氏

岩室氏は、『諸氏帳』に岩室大學介・長門守、『正徳二年自記』に岩室大學介の名と岩室城の名が見える。岩室大學家教は、山中氏一族であり、正応年間にこの地を領し、鈴鹿関警固を命じられていた。信長により廃城させられた後は秀吉に仕えるが天正13年に放逐される。城は土塁囲いの方形居館である岩室城（169）と岩室西城（179）が知られている。

ヘ. 小佐治氏

小佐治氏は、平業平の子孫と称しており、伊豆よりこの領地を得た。『諸氏帳』に、佐治八郎左衛門、『正徳二年自記』には佐治河内守の名と佐治住と見える。幕府から鈴鹿関警護役を命じられている。城は、丘陵上に土塁囲いの方形城館をふたつ連結したような佐治城（171）が知られている。

チ. 神保氏

神保氏は、橘姓を名乗り佐々木氏より神保俊信が領地を拝領したのに始まる。『諸氏帳』に神保出羽守・兵内、『正徳二年自記』に神保兵内と神保城の名が見える。城は、神保城（185）が知られている。

リ. 隠岐氏

隠岐氏は、佐々木秀義の五男義晴の子孫である。『諸氏帳』に隠岐左近大輔・平左衛門、『正徳二年自記』に隠岐右近大夫神保兵内と隠岐城の名が見える。城は、土塁囲いの方形居館として隠岐城（186）隠岐支城（189）や大佐治城（188）、大佐治北城（187）、砂坂城（190）、打越城（191）が知られている。

ヌ. 芥川氏

芥川氏は、『諸氏帳』に芥川左京亮・右近、『正徳二年自記』に左京介と杉谷住の名が見え、北山九家に数えられているが、その本拠地と城の位置は不明である。

②北山九家以外の五十三家

イ. 土山氏

土山氏は、『諸氏帳』、『正徳二年自記』に土山鹿

之助と土山住の名が見える。鹿之助は頼宮俊盛の次男である。城は、土山の背後の丘陵上に山城の土山城（192）と麓に城ノ越城（193）がある。

ロ. 平子氏

平子氏は、『諸氏帳』、『正徳二年自記』に平子主殿介と杉谷住の名が見える。城は、土山の背後の丘陵上に山城の平子館城（194）が知られている。

③その他の北山の氏と字の城

その他として、土山町今宿には、今宿西城（162）、今宿東城（163）が知られている。また、水口今郷には、今郷城（24）が知られているが城主は不明。

（6）三雲地域（図5）

三雲地域はこれまで、甲賀五十三家にその名を記す氏があるにもかかわらず、あまり甲賀武士団として認識され取り扱われたことはない。本稿では、甲賀武士団としての三雲地域を位置づけてみたい。

①三雲地域の五十三家

イ. 岩根氏

岩根氏は、『諸氏帳』、『正徳二年自記』に岩根長門守の名と杉谷住と見える。本拠地は湖南市岩根であるが、元は京真如寺領で、朝国氏や六角氏、山中氏などの支配も受けている。城は、岩根館（17）と岩根城（18・219）が知られている。

ロ. 夏見氏

夏見氏は、『諸氏帳』には夏見兵内、『正徳二年自記』に夏見大學の名と夏見住と見える。城は、夏見城（220）が知られている。

ハ. 針氏

針氏は、伴一族である。『諸氏帳』、『正徳二年自記』に針和泉守の名と針村住と見える。城は、針氏城（221）と針城（222）が知られている。

ニ. 宮島氏

宮島氏は、『諸氏帳』、『正徳二年自記』に宮島掃部介の名が見える。城は、平松城（223）と岡ノ山城（224）が知られている。

ホ. 三雲氏

三雲氏は、元は武蔵七党の児玉氏の末裔と考えられている。その子孫の浅見美乃が明徳年間に三雲を領して以来、三雲氏を名乗る。六角氏の被官である。『諸氏帳』には三雲丹後守氏之・新蔵人、『正徳二年自記』には三雲新蔵人の名と石部住と見え



图5 三雲地域

る。信長の家臣を経て、織田信雄、蒲生氏郷に仕え、後に家康の家臣となる。城は、麓に土塁囲いの方形居館である三雲城(227)と背後の山の三雲城(226)が知られている。特に詰城の山城は石垣を持つ織豊系城郭であり、三雲成持の居城として有名である。

①その他の三雲の氏

イ. 下田氏

下田氏の居城といわれている下田城(218)が知られているが詳しいことは不明である。

ロ. 青木氏

青木氏は、甲賀市青木の青木貞景の弟である青木五郎貞久が夏見に移り住んだものである。妹は蒲生高郷の妻ともなっており、その子が青木玄蕃允。六角氏との縁が深い。居城は、土塁囲いの方形居館である丸岡城(231)、東丸岡城(232)、城山城(233)、青木城(236)、青木館城(234)が知られている。また、青木忠左衛門正信の居館と伝えられている菩提寺城(235)など、すべて青木一族の城である。

ハ. 谷氏

谷氏は、青木氏の家臣で谷武兵衛兼家城の居城と伝えられている。土塁囲い方形居館である谷城別名西城山(230)が知られている。

ニ. 石部氏

石部氏は、青木氏の一族である。城は、享禄年間に石部右馬家長・家清によって築かれたと考えられている。現在の善隆寺全域で方形城館であった石部城(237)が知られている。

ホ. 朝国氏

朝国は柏木郷の四支傍示のひとつである「あさくにてんじんのもり」があった場所である。朝国氏の居館と云われている朝国城(13)と山城として横田城(12)が知られている。

(7) 信楽地域(図6)

信楽地域も三雲地域と同じように、甲賀五十三家にその名を記す氏があるにもかかわらず、あまり甲賀武士団として認識されたことはない。ここでは、甲賀武士団内での信楽地域を考えてみたい。

①信楽地域の五十三家

イ. 多羅尾氏

多羅尾氏は、元は近衛氏の一族であり、信楽庄を管理していたが、高山氏を経て多羅尾氏となったと

云われている。後に六角氏の配下となり代々信楽判官である。光教の子、光俊は信長の配下となり、小川に住む。秀吉の配下を経て、家康の信楽越えに尽力し家臣となる。『諸氏帳』には多羅尾和泉守・兵内、『正徳二年自記』には多羅尾四郎兵衛の名と杉谷住と見える。多羅尾は、西を山城、南に伊賀と国境と接するところであり、城は本拠地多羅尾を三方から囲うように位置する多羅尾古城(198)、多羅尾城山城(199)、多羅尾立岩城(200)が知られている。他にも多羅尾領内には幾つか城が存在している。東を伊賀と接する神山には神山城(201)もある。

ロ. 小川氏

小川氏は、伴氏の家系で興福寺の下司職である。小川左衛門尉俊盛の時に小川城を築城したと云われているが、本来的には多羅尾氏の領内である。『諸氏帳』には小川土佐守秀三・孫一郎貞勝、『正徳二年自記』には小川孫十郎の名と小川城と見える。小川は南西が山城との国境である。城は、昭和55年に発掘調査され、石垣や礎石建立建物が発見された16世紀後半の山城である小川城(209)が知られている。これは、後の多羅尾氏段階のものと考えられる。他にも、小川城の麓に小川西ノ城(210)、小川東ノ城(211)が知られている。

ハ. 杉山氏

杉山氏は、『諸氏帳』に杉山八郎・民部小輔、『正徳二年自記』には杉山八郎の名と杉山住みと見える。杉山は南を山城湯船に抜ける間道が走っているところで、城は、杉山城(212)が知られている。

ニ. 牧村氏

牧村氏は、『諸氏帳』に牧村右馬亮・八郎、『正徳二年自記』には牧村右馬亮の名と杉谷住みと見える。牧村は東を伊賀国境と接している。城は、牧村城(213)が知られている。

ホ. 宇田氏

宇田氏は、『正徳二年自記』に宇田藤内の名が見える。本拠地は勅旨村で東を伊賀国境と接している。宇田館は未発見である。他に南北朝期の岩倉城(215)が知られている。

ニ. 長野氏

長野氏は、長野刑部丞元信が天文年間に領地を得て長野城(217)を築城。後に秀吉の家臣となり、

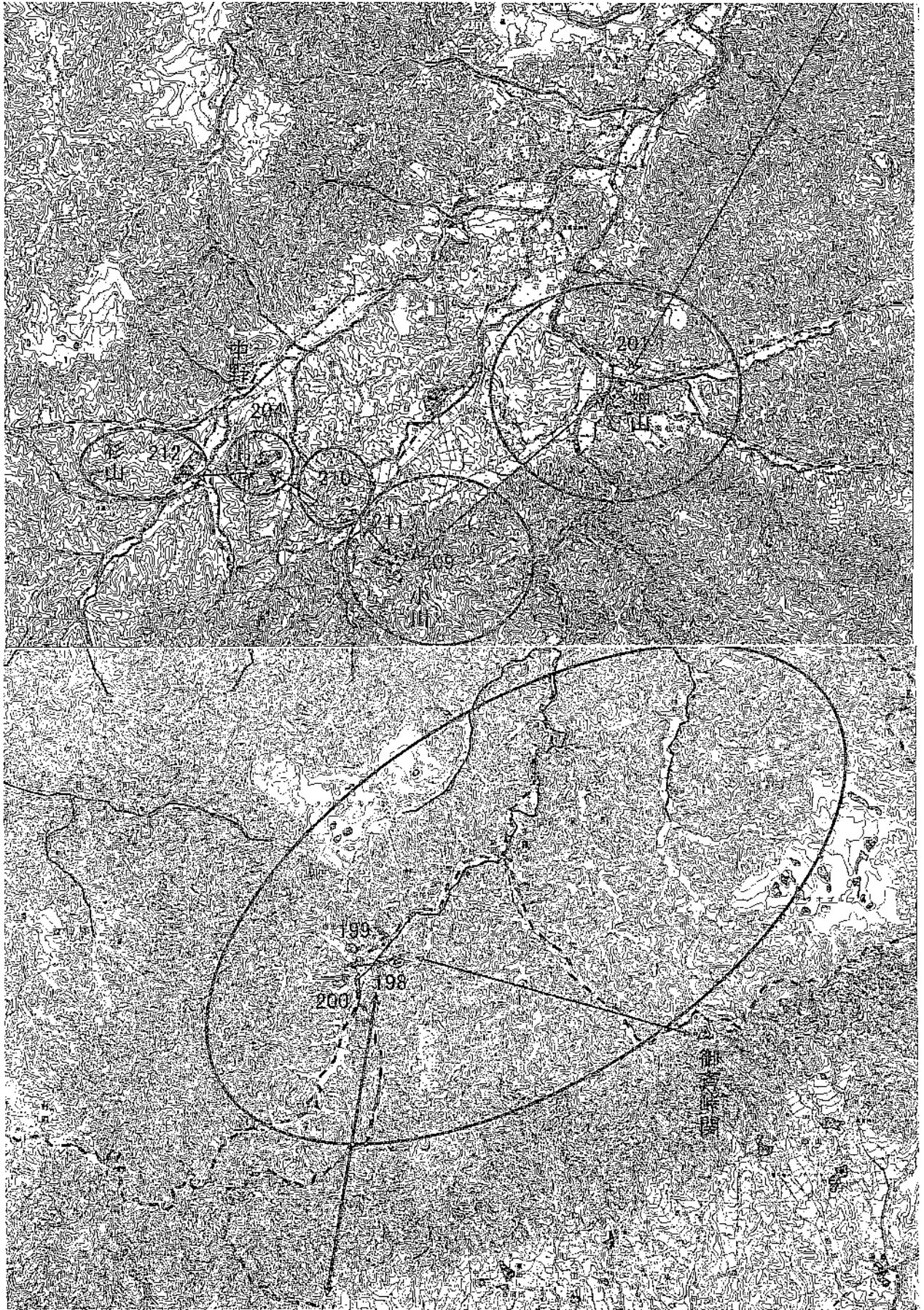


图6 信濃地域

大坂の陣で討ち死にしている。『諸氏帳』には長野刑部左衛門、『正徳二年自記』には長野刑部丞の名と杉谷住と見える。

ホ. 谷氏

城は、周知の遺跡からは欠落しているが、谷氏城(216)が知られている。

(8) 所在不明の五十三家

イ. 小泉氏

小泉氏は、『正徳二年自記』に小泉外記の名が見える。姓から水口町泉の可能性はあるが、領地、居城とも見つかっていず詳細は一切不明である。

4. ネットワークの持つ意味

このように、甲賀郡内の城を築いたと考えられる城主達はいずれも在地領主であり、古くからの姻戚関係にある者も多く、その多くは同名や同氏族または一族郎党関係にあることが分かる。また、そもそもは、荘園の下司職などの在地荘官が土着した者が多く、荘園制が崩壊して以降は在地を地盤とし、範囲は狭いが経済的・権力的にかなりの力を有していったと考えられる。さらに身分的には、御家人や奉公衆となった者が多く、守護六角氏と完全な被官関係にあるものは少ない。甲賀武士集団としては、六角氏には与力する形での参戦が多いことから見ても、武力参戦以外では地域的に独立した力を認めることができるであろう。そのような彼らが築城した城が、甲賀の城である。先に見たような密集した分布が地域のネットとなっていることは一目で分るであろう。それで次にはこのネットの位置づけと、城の類型について見ていきたい。

(1) 守るは道と川、そして地域

甲賀郡は古くから、伊勢国を経て大和や山城を経て京をつなぐ地域であった。北からの入口は栗太郡との境であり、南は鈴鹿峠をはじめとする伊勢・山城との国境である。この地域は、野洲川や東海道をはじめとする交通の要衝であった。甲賀の城の分布を見るとこれら道と川がいかに重要視されていたのかが分かる。城のほとんどが、街道と川を望む近接地点に配されており、城と城の距離間隔は、非常に近接しながら等間隔であり、あたかも点と点が結ばれてひとつの線となっているがごとくである。

逆に道路や河川に関わりを持たない内陸部の山間地の城は、極端な高い位置にある山城だけである。いずれの城も、近接の城はもとより、道路や河川、地域全体を死角無く見渡せるような絶好の位置に築造されていることが分るであろう。さらにこれらが、地域的なまとまりも見せている。地域領域は、地形的制約による堺や古代からの政治的な堺があるものと考えられるが、分布としては城の存在しない空白地域が在ることで確認できる。これが地域惣中として位置づけられる地域である。惣中の概念の及ぶ支配領域は、やはり記録で位置づけられているとおり三雲地域・柏木三家地域・荘内地域・北家地域・南家地域・信楽地域の6つの地域で構成されていることはほぼまちがいないところであろう。

それでは、この地域惣中を地域別に見ていきたい。三雲地域は、おおよそ栗太郡との境から横田の渡しまでの範囲である。この範囲には、野洲川が中央を縦に走り、左岸に東海道が延び、その街道沿いに甲賀武士は城を構えている。館の背後に山城を持っているのは六角氏被官三雲氏だけで、その地位が明確であるとともに、支配する地域が横田の渡しと信楽越え(三雲→宮町)との接点になっていることが重要である。野洲郡からの入口の両岸は、六角氏寄りの青木氏が城を構え、石部・菩提寺・横田に近い朝国まで力を及ぼしていたものと考えられる。

次に柏木地域である。入口には、横田の渡しがある。これを越えると柏木郷内に入る。柏木地域は北を伴氏が、南を山中氏が、南の信楽道・柚街道の接点となる水口を美濃部氏が支配していた。この地域の中央に東海道が走り、荘内地域との境に野洲川が走る。このことにより山中氏は、甲賀郡の入口に当たる横田の渡し東海道の最も伊勢寄りで国堺である鈴鹿峠の両口を支配していたという大きな意義を認める。野洲川は、横田渡しの南の酒人で野洲川本流と柚側が合流している。東海道は本流沿いを土山を経て鈴鹿峠に向かう。柏木地域と北山地域とは、新庄氏・儀峨氏あたりが境となる。このあたりに空白地があること、儀峨氏が六角氏・蒲生氏寄りであり、甲賀惣中に与していながらも独立した力が強いこととにひとつの意図を感じるところである。

北山地域は、東海道と野洲川左岸沿い、頓宮御所

までの間に城の分布が顕著である。終点が、山中氏が監視する鈴鹿峠である。また、土山氏を起点にして、さらに東に平子、鮎河、大河原とへて伊勢国境に向かうルート上にも城が築かれている。西には岩室、小佐治、隠岐を経て荘内地域深川へ出る間道ルートにも分布が顕著であり、間道も重要視されていたことがよく分かる。

荘内地域は柏木地域の南に位置する。美濃部氏の水口からの入口が、野洲川対岸貴生川の内貴氏の位置にあたる。このルートは、そのまま、飯道山の裾を巡り、奈良時代からの柚の渡しを越え三大寺→牛飼→上山をとおり信楽街道から牧村に抜ける街道となっている。この道筋は、奈良時代から野洲川沿いから信楽地域に入る重要なルートである。さて、野洲川の支流に柚川がある。柚川は酒人で合流するがその川筋が城のある岩阪や高山にあっている。さらに上流の内貴で柚街道と合流し、伊勢へとつながる。ここが荘内地域の南と接する南山地域の入口である。柚街道の起点は、荘内三家の鶉飼氏深川にある。これより東は、柚川沿いに走る古代の東海道と呼ばれている倉歴（くらべ）街道【鹿深越え】となる。南山地域には、この街道と柚川を望む両脇に数多くの城が築かれている。右岸には葛木氏→寺庄氏→高野氏→大原氏→上野氏→油日、最終的には余野を越え国堺に至る。左岸では野田氏→野尻→池田氏→青木氏→多喜氏→毛枚→和田氏と続き、和田で国堺に近い高嶺に出る。ここも重要ルートとして城が配置され強固な支配が行われている。また、深川からは別ルートとして、倉治氏と野田、服部氏と竜法師の間を抜けて磯尾から国堺に出るルートがあり、その両側に城が築かれている。さらに、野尻から倉歴街道から分岐する形で、竜法師→柑子→野川→下馬杉→上馬杉→国堺へ抜ける間道と浅野川が存在しており、ルート沿いの両岸に城が築かれている。

最後に信楽地域であるが、甲賀郡からは三雲から宮町を経て牧に出るルートと貴生川→三大寺→牛飼→山上→牧へと信楽街道と信楽川を登るルートがある。その先は長野で神出から国堺に至るルートと小川・多羅尾を中心に山城に向かう京道と伊勢の国堺に向かうルートがあり、それを見下ろす位置

に城が築かれている。

このように、城の選地はこれら街道と河川、それら全体を含んだ地域を遠望できるような見晴らしの良い地が選択されていることが分かる。これらは、ネットで地域全体をカバーすることを目的としているもので、まるで第二次大戦中のマジノラインの要塞群やカレー海岸の沿岸防御網、日本の各地の防空網そのものである。まさしく、守られるべきは、道と川、そしてそれを包括する領地としての地域なのである。

(2) 国境と峠

さて、これら城の分布でもうひとつ視野に入れておかなければならないことがある。国堺と国堺の出入口であり、道の起点・終点にあたる峠である。

甲賀郡の南は伊勢、西は山城の国境と接している。特に、伊勢との国境には鈴鹿山脈という険しい盾列く山並みがあるとはいえ、国境の峠越えルートは数多くある。城の分布を見る限り、国境に領地を持ち武士団がいることは間違い無く、峠を意識した城の配置と考えられるものがある。最も有名で重要な峠は鈴鹿峠＝鈴鹿関である。近江と伊勢の関わりの中では、古来からここを安全に越えることが求められていた。特に古代にあって垂水頓宮が置かれ伊勢神宮への齋王の一行や奉幣使一行が伊勢齋宮向かっていた頃には切実な問題であった。この峠の警固を役として命じられていたのが、近江側が山中氏である。また、伊勢側が伊勢平氏関氏である。山中氏は峠近くに領地を持ち、居館を構えて、これら一行を峠向こうの関氏に送り届けるのが役目であった。その伊勢平氏と姻戚を結び分家したのが、後の宇田山中氏である。鈴鹿峠の北には、笹道から笹道川沿いから山女原を通り三子山（568m）嶺へでるルートもある。ここは黒川氏が領域として押さえていた。さらに大河原から北の仙ヶ岳（961m）を越え武平峠・仁正寺越湯の山越から菰野へでるルートも押さえていた。鈴鹿峠の南には、大原市場→相模→烏居野→上田→大窪→神のルートから国境高畑山に向かうルートがある。高畑山（773m）→那須ヶ原山（800m）→油口岳と峰続きに続き、和田氏と上野氏が押さえる倉歴街道から鹿深越えである余野（甲賀）→倉部（伊賀）がある。その西

では、国堺に高い山がない。甲賀側には多喜氏と馬杉氏の城が守り、伊賀側は湯船に城が築かれ対峙している。その西が、杣街道・浅野川の終着である焼尾越え（内保越え）である。内保（伊賀）から西へは、岩尾山（471m）が峰続きにあり、信楽神出から伸びる桜峠にいたる。

伊賀国丸柱に越える桜峠は丸柱越え、信楽越梅嶺越えとも云われる。現在も国道が走り、ここから伊賀上野まではすぐである。多羅尾は南に伊賀、西に山城の国境に当たり、奈良と近江、京から伊賀伊勢に抜ける間道となっていた。峠として、伊賀から上野に抜ける御斎（おとき）峠、野殿越え、島ヶ原越え、押し原越えがあり、多羅尾は全ての峠の分岐点に当たる。また、下朝宮は山城と国境裏白峠で山田、杣峠で湯船村へと続いている。このように、甲賀は伊勢との国堺として、峠道を要衝として広大な延長を持つ国境と接していた重要拠点であることが分かり、高嶺氏の一群の城配置に認められるように地域支配と城の位置づけに対伊賀国への防御姿勢が色濃く感じられるであろう。

（3）. 様々な城の類型

ここでは、数に限りはあるが、個々の城の形態が幾つか類型できるので、その様相を見ておきたい。

①方形城館（居館）型（A類）

堀と土塁により、方形に区画されたもので、半町四方以上の広さのものが認められる。他地域では通常、平地の居館タイプとして認識されるものである。その立地から平地集落近くにあるもの（A-1類）と甲賀では地形的制約の為か、低丘陵上にも築かれているもの（A-2類）がある。いずれも、所有者の伝承が色濃く残っており、居館として位置づけでよいであろう。集落内にあるものと離れた位置にあるものがある。さらに、二つの方形居館が並列にひっついたような形のもの（A-3類）と方形城館に付属した施設が付くもの（A-4類）がある。

②方形城館＋城塞化された集落型（B類）

方形城館と城塞化された集落が一体となっているもの。形式的には珍しいもので、現時点では山中氏居館と植城との関係がこれに当たる。現在確認できているのはこれ一件であるが、集落が拠点であるため、今後、他所でも発見される可能性がある。

③方形城館＋山城型（C類）

麓に方形城館があり、背後の山に山城や砦がある場合。甲賀ではやや離れた位置に山城が在る場合もあるが、位置的にみて根小屋と詰城などの上下関係にあるものと考えられる。例としては三雲館＋三雲城がある。

④方形城館もしくは山城の地域配置型（D類）

甲賀では最も多数認められる型式である。在地支配領主が、領地とその中央もしくは、側を街道と川が走る場合に、その両岸や領地を眼下に望み囲うように城を配置するものであり、典型的な甲賀様式ともいえるものである。この場合、A-2類や4類のものや山城型式（E-2類）のものを交互に配置したりする場合がある。3個～8個がひとつの単位となっている。これらが、同名惣中の惣領が全てを構築し管理しているのか、同名中で相互に築き管理しているのか、地域でまとまっても、個々の城が独立しているのか等、本城支城関係も含めて今後論議されるべきものとする。

⑤山城型式（E類）

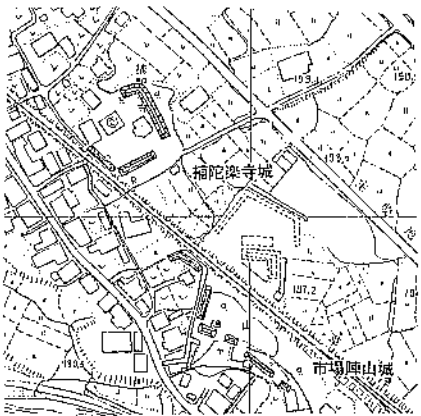
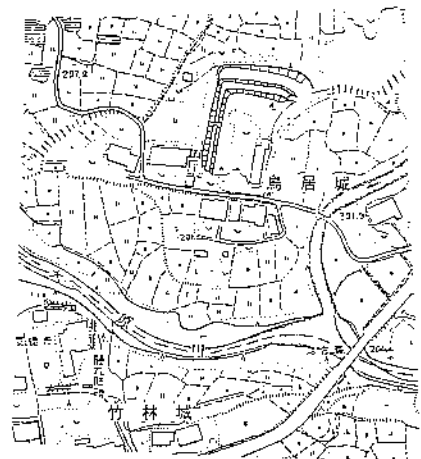
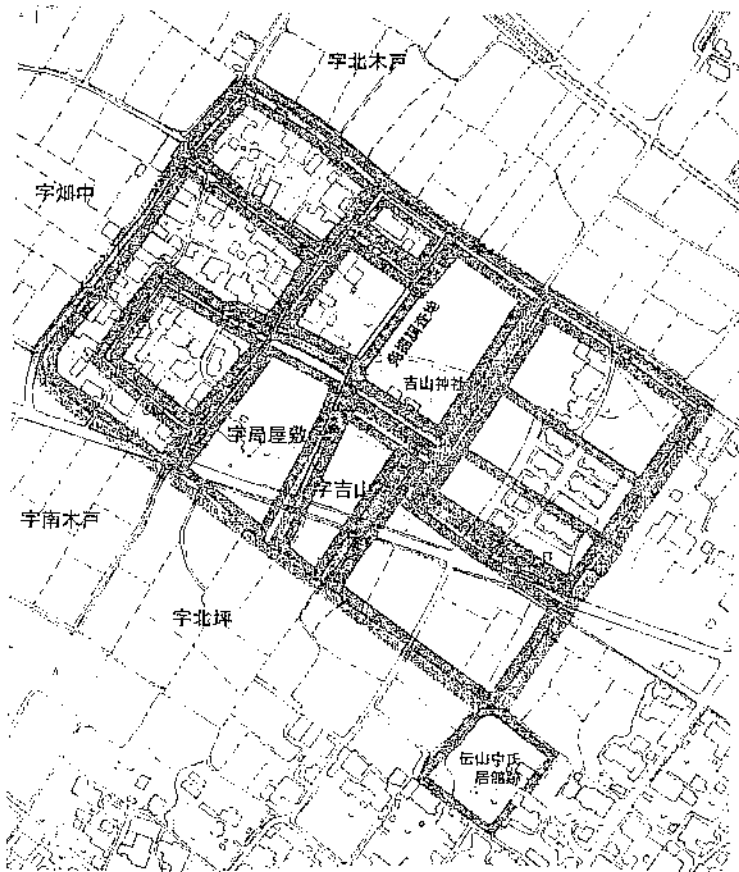
これら意外にも、典型的な山城（E-1類）が存在する。ひとつは、独立して巨大なものとして黒川氏城があげられるであろう。主郭・帯郭、土塁、堀切など典型的なパーツを有していながらも、形態としてコンパクトかつ小規模なもの（E-2類）も存在する。

⑥山城機能分散型（F類）

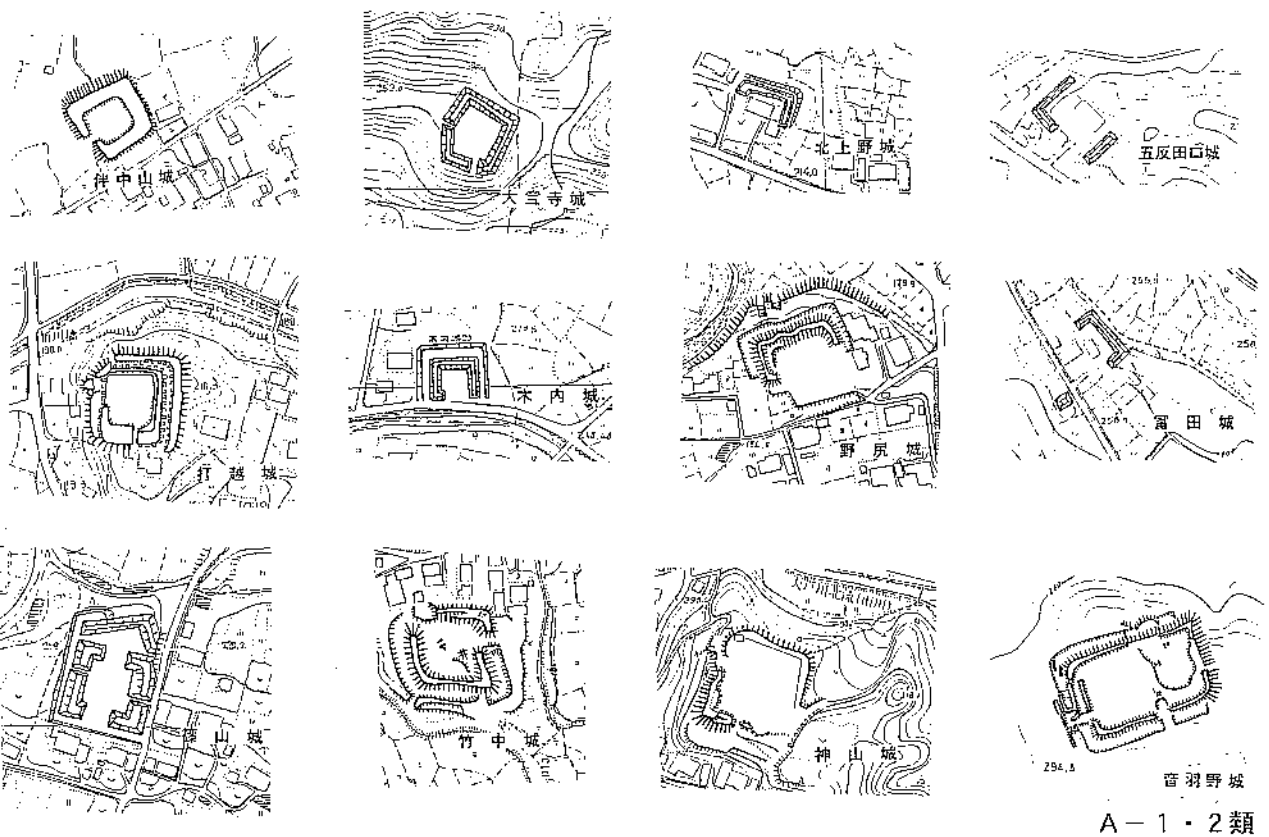
山上城Ⅱ～Ⅳのようなものは機能分散型として捉えてるしかないかもしれない。本来は、ひとつの山の上で行われるべきものが、地形的制約のためか、個々の機能として、丘陵上に分散して認められるものである。

これら在り方の違いは、武士団構成や地域支配関係の違いや、防御態勢の考え方の違いからおこるものとする。ただし、平地に築かれている居館以上に、川沿いや奥地の多数の城が、平地ではなくシダの葉のような割れ谷から伸びる舌状台地の上に築かれているという立地的な特徴は甲賀特有の地形的制約によるものであろう。

5. まとめ



B類



A-1・2類

図7 城の類型(1)

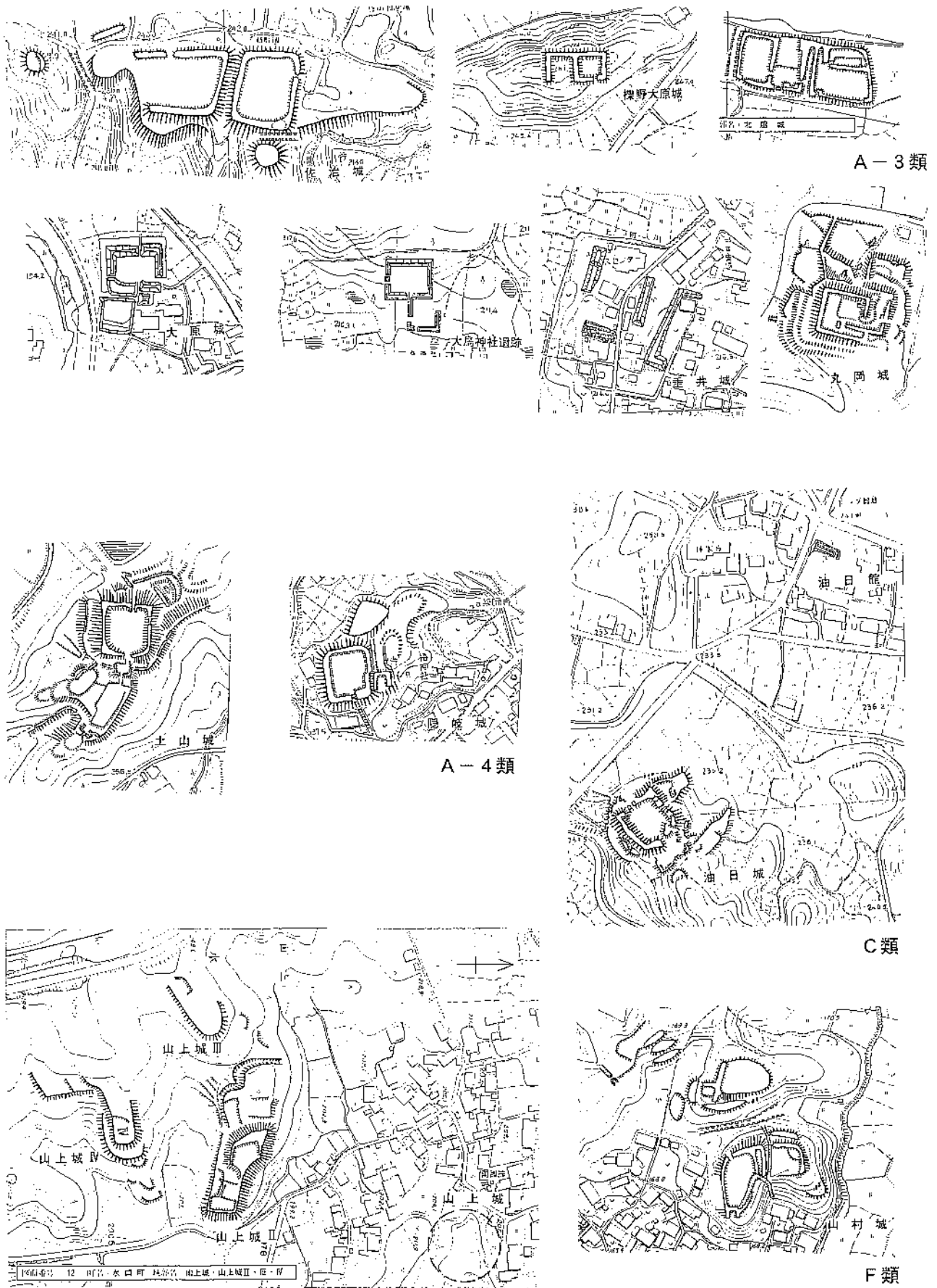
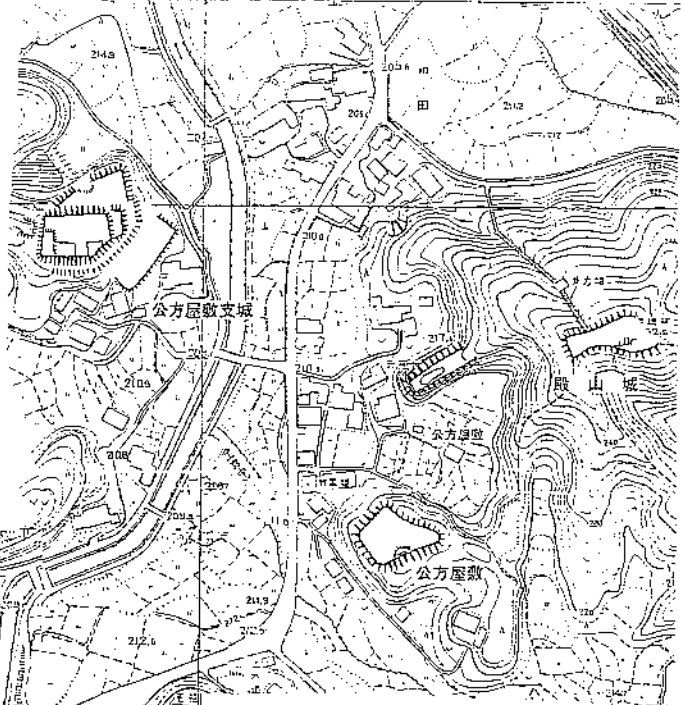


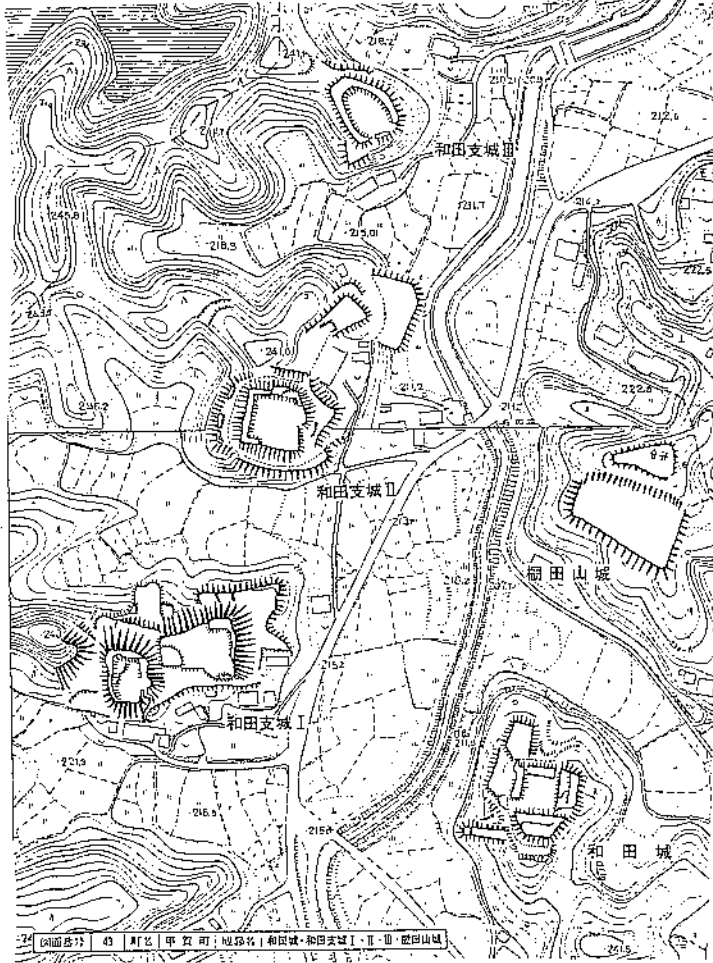
図8 城の類型(2)



D類



D類



E類

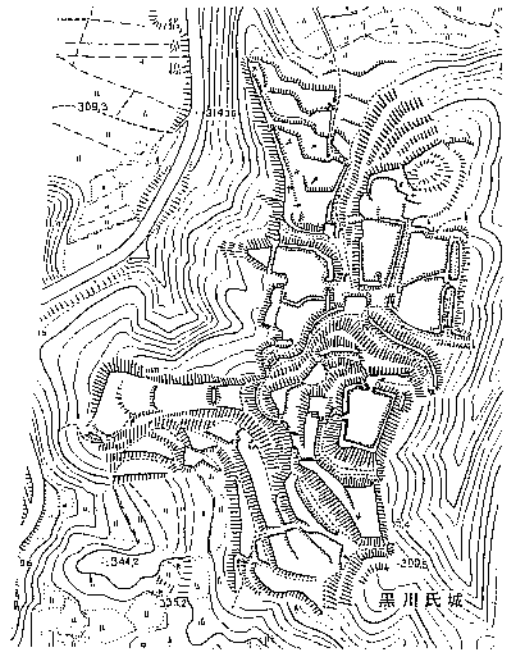


図 10 城の類型 (4)

以上のことを総合すると、甲賀の城を考える上においては以下のようなことが要素となっているといえるであろう。後の甲賀武士団は、古くは鎌倉御家人として住み着いた武士や、荘園の地元荘官達であった。それが地域で次第に経済的・社会的・政治的・権力的に大きな力を持つようになり、支配地域としては大字単位として狭く限られてはいたが、中世にあつては、次第に在地領主としての生活基盤を形成していた。本来は、守護と被官関係を持ち、支配される側としてひとつの縛りを持ってよかったが、この地域は、古来より伊勢を經由して京と大和をつなぐ重要な街道や関があつたため、これらの道路・関警固を幕府や朝廷から担わされていたという別に重要な職分があつたため、それらの役割を付加され地域として、職分を忠実に果たすため、また、地域もしくは社会の秩序の安定のために、自治的な要素を高めていった。それが必要に応じて、次第に互いに連携を採るようになってきた。結果として、それが惣自治の在り方として反映され、最初は同名・同族的地縁血縁であつたのが、次第に、血縁・地縁を越えて、地域的な連携を越えた同名中組織に変化し、さらに上位の相互関与としての地域惣中に移行した。そして、最終的には群単位での郡惣中に発展したと考えられる。より大きな集団でより大きなエリアの支配を行っていくためには、それなりのルールが必要であつたのであろう。最終的に掟書きが作成されるのはそのような意味合いからと考える。ただし、発想的には、何らかの外的があることを前提に急速に結束したとも考えられる。いわゆる仮想敵国である。これについては、城の分布から、ひとつは甲賀一揆と伊賀国一揆の対立が根底にあつたものとも考えられる。もう一つは六角氏とのバランスを崩した織田信長の侵攻であると考えられる。在地領主としての経営と保全に即した形での館の城塞化は、15世紀後半から近江全般で見られる。甲賀でも、平地の方形居館や植城のような集落の城塞化にそれらの形態の形成が認められるのはこのためであると考えられる。栗太郡の出口、横田の渡し、鈴鹿関をはじめとする関と街道警固という、甲賀武士団の本来で特有の職務を目的とした城も含まれると考えられる。このように、道沿いや

川沿いの小規模な領域を守りながら連携して地域ネットワークを形成していくという城の位置づけは、道沿いと川添いや領域を守る城であつたり、伊賀国との争乱を意識したものとして、国境にいる武士団の城があつたであろう。これらが甲賀の城のネットワークとして考えられものである。

6. おわりに

ここで、検討してきた郡惣中における甲賀武士団の城ネットワークは、甲賀武士団の個々の城の形態とその位置づけを考えていく上での基本的なフレームとなるものと考えている。これらのグルーピングと城の位置関係は、長い年月における地域集団の在り方や地域での城の位置づけを物語っていると考えられる。これらを把握した上で、個々の城の形態的構造が比較検討できれば、近江でも謎の多いとして片づけられていたこれらの城郭群に光が当たるものとする。本来は、すべての城の構造の累積から、その地域関係を物語っていかなければならないが、まだまだ、正確な調査が成されていないのが現状であるので、今回は研究の導入部として、その視点を論じた。今後、詳細な城構造論を従えた、これら同名関係、地域関係の詳細な検討が進められる礎として、活発な論議ができることを望みたい。

(きど まさゆき：調査整理課 課長心得)

註

- (1) 石田善人「甲賀郡中惣と大原同名中惣について」『柴田實先生古希記念日本文化史論叢』記念会 1971
- (2) 『滋賀県中世城郭調査報告』2-甲賀郡- 滋賀県教育委員会 1984
- (3) 石田晴男「両山中氏と甲賀「郡惣中」史学雑誌95-9 1986、白井進「中世後期在地領主の訴訟裁定-甲賀山中氏を素材として-」日本歴史568、高木昭作「甲賀山中氏と「群惣中」歴史学研究325 1967、村田修三「戦国時代の小領主-近江国甲賀郡山中氏について-」日本歴史134 1973、久留島典子「中世後期在地領主層の動向-甲賀郡山中氏について-」歴史学研究497 1981
- (4) 竹山靖玄「近江国山中氏の考察」鷹陵史学 1977
- (5) 木戸雅寿「ほ場整備関係(経営体育成基盤整備)遺跡発掘調査報告書33-2『植城遺跡』滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会 2006

- (6) 細川修平・堀真人 近畿自動車道名古屋神戸線建設に伴う発掘調査報告書『竜法師城遺跡』・柑子塩野線緊急地方道路整備事業に伴う発掘調査報告書『竜法師城遺跡・池ノ尻遺跡』滋賀県教育委員会・(財) 滋賀県文化財保護協会 2006
- (7) 中井均共著『京都 乙訓・西岡の戦国時代と物集 女城』文理閣2005
- (8) 川田政晴・木戸雅寿『上野城跡発掘調査報告書』甲賀町教育委員会1989
- (9) 『小川城発掘調査報告書Ⅰ・Ⅱ』信楽町文化財報告書第1・2集信楽町教育委員会 1996・1998

参考文献

- 角川地名大辞典 角川書店 1974
- 甲賀郡史(上) 甲賀郡教育会 1926

編集後記

序文にありますように、本協会は35周年を迎えました。これまでに蓄積された文化財に関する情報は膨大なものであります。その情報にふたたび埋もれることのないよう心がけたいものです。さて、今回の紀要には8本の力作の論考が寄せられました。さらに、35周年を記念して紀要の総目次も巻末に掲載いたしました。

本書が文化財の保護のため、広く活用されることを願っております。

(M.N.)

平成18年(2006年)3月

紀 要 第19号

編集・発行：財団法人滋賀県文化財保護協会

滋賀県大津市瀬田南大萱町1732-2

TEL (077)548-9780

FAX (077)543-1525

URL: <http://www.shiga-bunkazai.jp>

E-mail: mail@shiga-bunkazai.jp

印刷・製本 富士出版印刷株式会社